

「東西文化の交流点」で ロシア連邦ボルガル遺跡を巡る ポリテイクス

櫻間 瑛

日本学術振興会特別研究員 P.D

ヴォルガ河沿岸の古都ボルガル。その遺跡は、ロシアのイスラーム聖地とされる一方、キリスト教との共存も強調されている。しかし、近年の文化遺産保護運動は、その矛盾を明らかにするものとなっている。



世界遺産ボルガル

二〇一四年、ユネスコ世界遺産委員会により、ロシア国内二六番目の世界遺産として、ヴォルガ河とカマ河の合流点付近に位置する「ボルガルの歴史的考古学的遺産群」の記載が決定された。

ボルガルは、一〇世紀にヴォルガ沿岸地域に繁栄したヴォルガ・ブルガル国家の首都で、東西交易の中継点として栄えた。ここには、中東地域からの使節も往来し、北方ユーラシアで最



ボルガルから眺めるヴォルガ河 (撮影・松本路朗)

初のイスラーム国家となった。その後、モンゴル軍の征服を受けるが、一三世紀に成立したジョチ・ウルスの最初の首都と

なり、引き続き東西交流の中心地として機能し続けていた。世界遺産の認定に当たって評価されたのは、この東西文化の接点、地域の最初のイスラーム拠点だったことである。同時に、現在のこの地域に居住しているタタールの聖地としても、この遺跡は認識されている。

タタールとは、言語的にはトルコ人に近いテュルク系民族で、その大半はスンニ派のムスリムである。現在ロシア国内には約五〇〇万人が居住しており、最

大の少数民族として、大きな存在を示している。タタールの名を冠するタタルスタン共和国は、ロシア連邦内でも傑出した民族自治共和国として、タタール語やタタール文化の復興に力を入れている。ボルガルの世界遺産申請も、このタタルスタン共和国が主導した。

現代のタタールとボルガル復興

現代のボルガルのターニングポイントとなったのが一九八九年である。無神論を標榜したソ

連の崩壊を間近に、タタールのあいだでムスリムとしての意識が高まるなか、「聖ボルガルの集い」がおこなわれた。これは、ヴォルガ・ブルガル国家のイスラーム受容一〇〇周年（イスラーム歴換算）にちなんでおり、イスラーム受容の聖地としてボルガルで集団礼拝をおこなったのである。ボルガルには、宣教に来たムハンマドの弟子が埋葬されたという伝説があり、それにあやかっって巡礼に訪れるという習慣がある。「集い」は、この習慣にもちなんで、以降毎年実施されるようになった。

その後、この遺跡の復旧・発掘調査も活発になった。そして、二〇一〇年にはタタルスタン初代大統領のシャイミエフにより、「復興基金」が設立され、タタール民族の故地としてボルガルの修復・開発が積極的に推進され、世界遺産の認定も目標に掲げられた。この事業では、敷地周辺に博物館や新しいモスクの建設



新設されたホワイト・モスク (撮影・松本路朗)

も進められた。

一方、現在のタタルスタンでは、イスラームがロシア正教と共存してきたということがしばしば強調されている。二〇〇〇年に世界遺産として認定された共和国の中心都市カザンにあるカザン・クレムリンには、こうした宗教共存の象徴として、ロシア正教の聖堂とイスラームのモスクが並び立っている。

ボルガルも、その敷地内に帝政期に建てられた教会跡地とミナレットが並んでおり、両宗教

の共存が示唆されている。また、ボルガル開発に当たっては、地域のロシア正教の中心であるスヴィヤシスク島の開発も並行して進めることで、やはり両宗教への配慮を示している。

遺産復興の影

ボルガルの復旧・開発は、基本的に好意的に受け止められている。インフラ・施設整備、世界遺産化による知名度の上昇により、観光客の数も増加し、経済的な利益ももたらしている。

しかし、この大規模な開発事業に対しては、多くの批判も寄せられている。世界遺産の審議に当たっては、周辺施設の整備などに対して、景観を破壊しているとの指摘が相次いだ。遺跡の修復自体についても、再建されたミナレットの真正性に関して疑義が表明されるなど、問題が指摘されている。

また、タタールの民族主義者からは、観光開発に対して、「聖



敷地内のミナレットと教会跡 (撮影・松本路朗)

なるボルガルを汚すもの」という声もあがっている。さらに、スヴィヤシスク島の開発について、ここがかつての改宗政策の中心だったことから、自分たちの歴史に対する裏切りとして、反発も出ている。

ボルガル遺跡は、地域のイスラームの歴史、キリスト教との共存のシンボルとされている。しかし、その復興事業は、歴史の再現・宗教共存の困難を顕在化させるものともなっているのである。